

Title	コンセンサス形成メカニズムに関する一考案
Author(s)	山際, 和久; 鳥井, 弘之
Citation	年次学術大会講演要旨集, 4: 74-78
Issue Date	1989-10-10
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/5257
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般論文

○山際 和久、鳥井 弘之 日経産業消費研究所

コンセンサス形成メカニズムに関する一考察

現代社会には様々な大規模施設が存在し、今後も作られようとしている。これらの施設が「安全だ」と感じるか、「不安だ」と感じるかは、何によるのか。現代社会ではコンセンサスの形成が困難になってきている。そこでビジネスマン約1000人を対象にアンケート調査を実施し、コンセンサス形成のメカニズムを探った。1つの調査で簡単にメカニズムが解明できる問題ではないが、1つの糸口にはなるであろう。

施設の「安全」「危険」を調査

アンケートの発送は1010通で、810通の回答があった。回答率は79.4%である。

まず、17の施設について、「最も安全だ」と思うもの、「最も危険だ」と思うものそれぞれ2つつつ選んでもらった結果は（図表－1）の通りである。予想された結果ながら、「危険だ」とした人が最も多かったのは、原子力施設である。逆に「安全だ」とした人が最も多かったのは、新幹線であった。「危険だ」とした施設について、原子力施設とそれ以外の施設に分けて、理由を聞いた。その結果は、（図表－2）の通りである。原子力施設では「不安になる情報が多い」「情報公開が不十分である」という声が強く、その他の施設と違った様相を示している。「安全だ」とした施設について、そう判断した理由を聞いたところ、（図表－3）の結果を得た。（図表－2）の原子力施設以外と（図表－3）を比べてみると、「安全」か「不安」かの判断に、技術評価や技術の分かりやすさが大きく影響することがわかる。

技術を知ることで「安全」と判断

17の施設について回答者はその技術内容についてどの程度知っているのだろうか。それぞれの施設について、技術的内容をよく知っているか否かを聞いてみた。その結果は、（図表－4）の通りである。新幹線、火力発電所などで、技術を知っているという人の数が、知らないという人を大きく上回っているのは当然と考えられる。

では、技術的な内容に対する知識の有無が、「安全」「危険」の判断に関係があるだろうか。100人以上が最も「危険」と判断した6施設について、その人達が技術的内容を知っているかどうかを調べたのが（図表－5）である。施設によって差はあるものの、「知っている」とした人が「知らない」とした人よりはるかに多い。逆に、技術内容を「知ってる」とした人のうち「危険」と答えた人の割合、「知らない」とした人のうち「危険」と答えた人の割合を示したのが（

図表－６）である。６施設いずれも、「知らない」という人の方が「危険」と考える率が高い。

同様に、「安全」と考えることと技術内容の知識の有無の関係を見よう。１００人以上が最も「安全」とした５施設について、「安全」と答えた人の知識の有無を表したのが（図表－７）である。「きけん」の場合と全く逆で、「安全」と考えた人の多くが技術内容を知っており、「知らない」人は非常に少ない。また、「知ってる」とした人と「知らない」人のうちどれだけが「安全」と答えたかを示したのが（図表－８）である。「知ってる」人が、多くの割合で「安全」と答えている。

体験は「安全」方向に作用、家族の勤務は相関なし

１７の施設のうち日本に存在する１３施設について見たり、体験したことがあるかどうかを聞いてみた。最も「見たり体験した」人が多いのは新幹線で９５．４％、次が国際空港の８５．９％、３位が火力発電所の６０．２％であった。「見たり体験した」人が少ないのは、ロケット発射基地の３．５％、大型粒子加速器の３．６％、バイオテクノロジー研究施設の８．５％などであった。知識の有無と同じように、「見たり体験した」人と「してない」人のうち、「危険」と答えた人の比率を調べてみると（図表－９）のようになる。原子力以外は両者に大きな差がないが、わずかながら「してない」人の方が「危険」と答えた人が多い。「安全」と１００人以上が答えた５施設について、「見たり体験した」と「安全」との判断の関係は（図表－１０）のようになっている。「見たり体験した」人は「安全」と判断する傾向が強い。

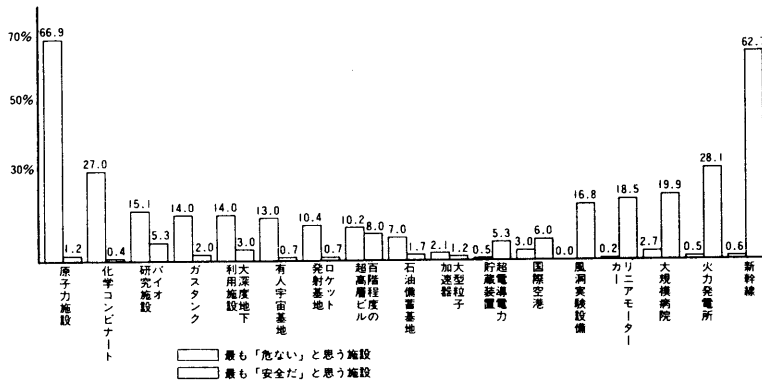
次に、各施設について家族や知人が関係機関に勤めているなど、何らかの深い関係があるかどうかをきいている。「深い関係」のある人が最も多いのは大規模病院で２５．６％が関係している。次が新幹線の２０．０％、火力発電所の１８．３％となっている。関係者が少ないのは有人宇宙基地の０．７％、大型加速器の２．１％、超電導電力貯蔵装置の２．２％などである。「深い関係」と「危険」という判断の関係は（図表－１１）であった。「深い関係」と「安全」という判断の関係は（図表－１２）の通りであった。「危険」「安全」のどちらの判断とも、家族が勤めるなど「深い関係」との間には特筆すべき相関は見られないようだ。

ここで考えているような大型の施設を作るか否かは、安全性の評価が重要な判断材料になる。積極的に「安全」だと考える人が「危険」だと考える人よりはるかに多ければ、その施設に対する社会的なコンセンサスがあると見てもほぼ間違いない。そこで、（図表－１）の「安全」と答えた人数に「危険」と答えた人数を加えた数字を、仮に「関心の強い人の数」とする。ある施設を作るとき、賛成や反対をするのは関心の強い人で、あとは傍観者と考えられる。このような仮定の上にたって、「関心の強い人の数」のうち「安全」と答えた人がどれだけいるかを「コンセンサス形成率」と呼ぶことにする。各施設について安全性に関するニュースなどをよく見かけるかどうかを聞いている。ニュースをよくみると

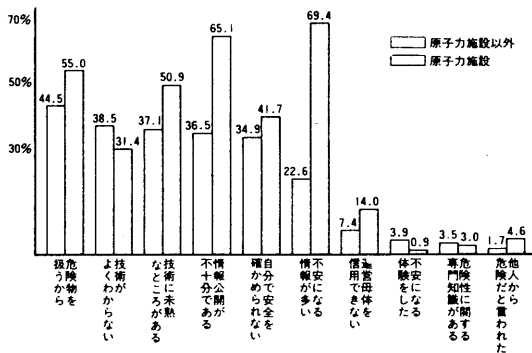
した人数と「コンセンサス形成率」の関係を示したのが（図表－１３）である。
この両者の間には明確な相関はみられない。

以上のような結果から①技術に関する知識のある人ほど「安全」と考える傾向がある②逆も真で、技術に関する知識のない人は「危険」と考える傾向がある③見たり、体験したりすることは、「危険」との判断にはあまり影響ないが、「安全」と判断する人を増やす傾向がある④家族や知人が関係機関に勤めることなどは「安全」「危険」の判断にあまり関係ない⑤安全性に関するニュースの多さは「安全」「危険」の判断にあまり関係ない――などがいえる。

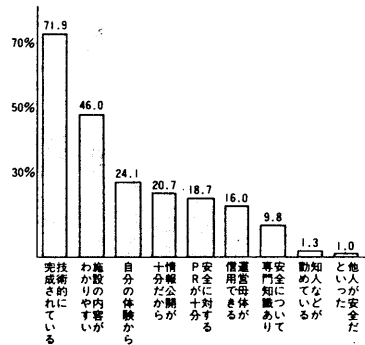
（図表－１） 各種施設の安全性に対する見方
（「安全」も「危険」も２つずつ選択）



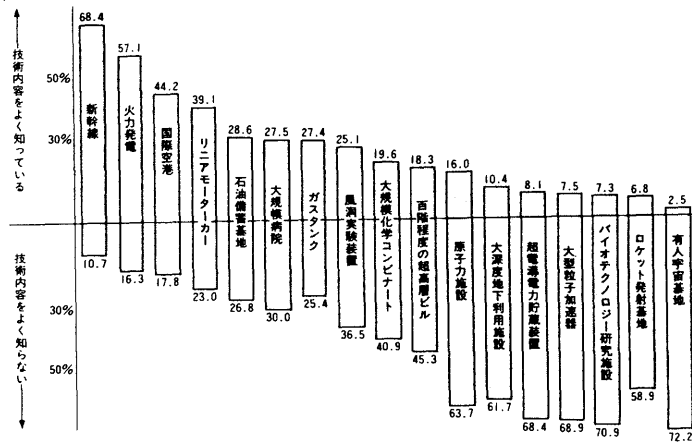
（図表－２） 各種施設の危険だと思う理由（原子力とその他）
（いくつでも選択）



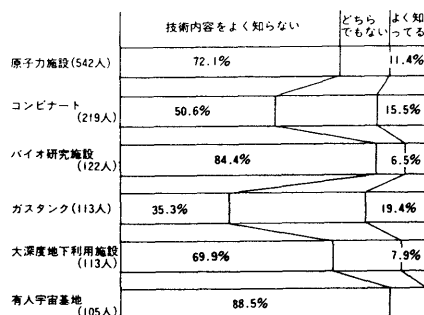
（図表－３） 各種施設の安全だと思う理由
（いくつでも選択）



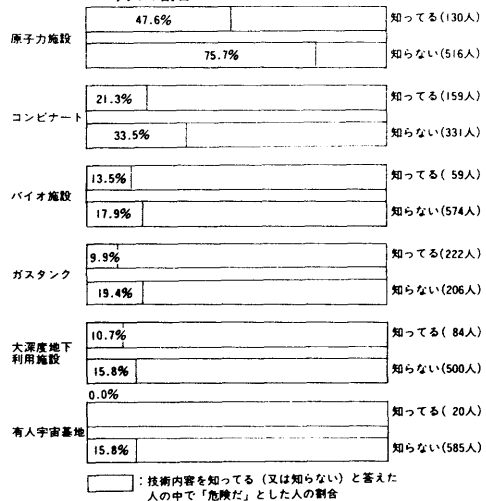
(図表-4) 各施設について「よく知ってる人」「よく知らない人」の割合



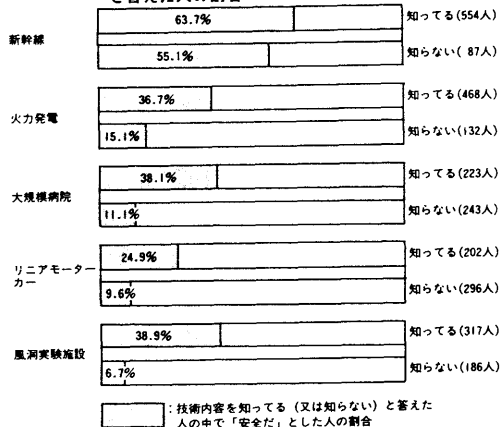
(図表-5) 各種施設で「危険」とした人のうち技術内容の知識のある人、ない人の割合



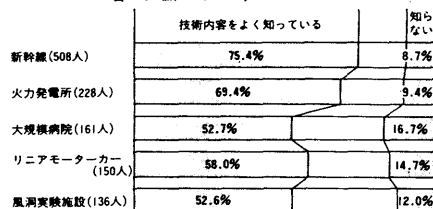
(図表-6) 各種施設の技術内容の知識の有無と「危険」と思う人の割合



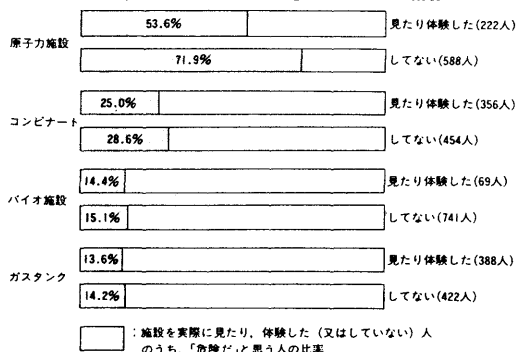
(図表-8) 各種施設について技術内容の知識の有無と「安全」と答えた人の割合



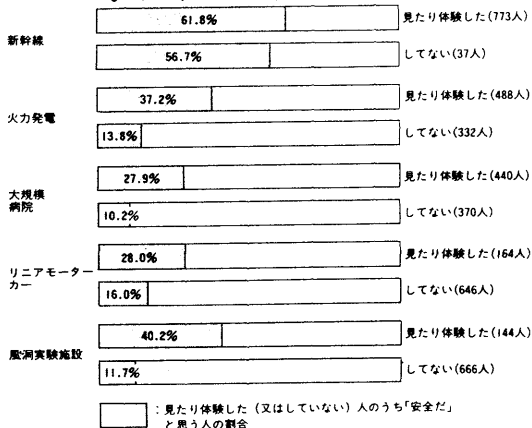
(図表-7) 各種施設で「安全」と答えた人のうち技術内容の知識のある人、ない人の割合



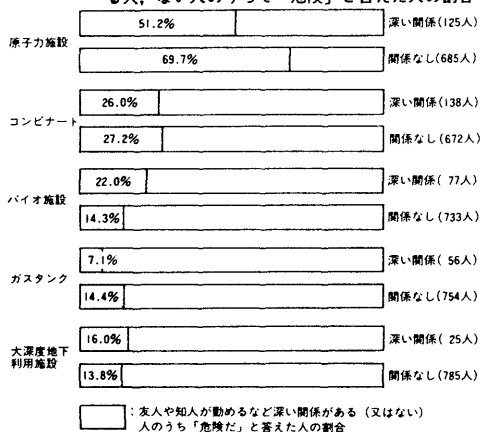
(図表-9) 各種施設について、自分が見たり体験したことのある人、ない人のうち「危険」と答えた人の割合



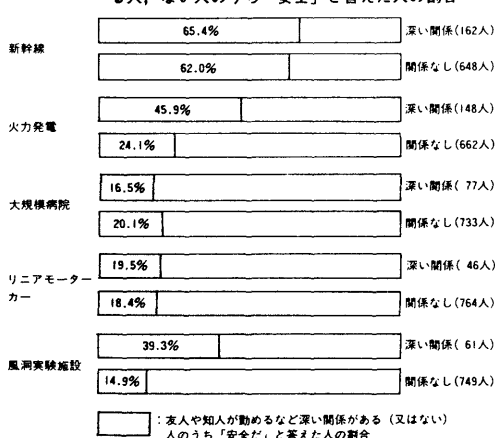
(図表-10) 各種施設について、自分で見たり体験したことのある人、ない人のうち「安全」とする人の割合



(図表-11) 各種施設で家族・知人が勤めるなど深い関係のある人、ない人のうち「危険」と答えた人の割合



(図表-12) 各種施設で、家族・知人が勤めるなど深い関係のある人、ない人のうち「安全」と答えた人の割合



(図表-13) 安全性に関するニュースなどをよく見ると思う人とコンセンサス形成率

